『高級中学課本・語文』における「鴻門宴（鴻門の会）」の扱いについて
——日中教材比較研究——

青 木 五 郎・位 藤 紀美子・中 井 光

On the Treatment of "Hongmen Yan (Komon no Kai)" in Gobun, a Chinese Textbook Used in Chinese Senior High School
—Comparative Analyses of Teaching Materials in Japan and China—

Goro AOKI, Kimiko ITO and Hikaru NAKAI

Received April 30, 1996

抄録： 日本と中国の共通古典教材として，日本でも教科書収録数の極めて多い『史記』の「鴻門の会」をとりあげ，両国の教科書である「古典Ⅰ」と『語文』およびそれぞれの教授指導書での扱われ方を比較した。本文としての収録箇所や，句読点の施され方とそれに伴う解釈の違い，語注の特徴を詳細に検討し，また『語文』の章末に用意された「思考と練習」の内容などを紹介して，中国におけるこの教材の扱われ方を分析し，日本の漢文教育を見直す一つの材料として提示した。

索引語： 漢文教育，日中教材比較研究，「鴻門の会」，「古典Ⅰ」，「語文」

Abstract: In this paper we take up "Komon no Kai" in *Shiki*, one of the classics taught both in Japan and China, and compare the way it is treated in Japanese textbooks of *Koten* I and their teacher's manuals with the way it is treated in *Gobun*, a Chinese textbook, and its teacher's manual. Specifically, we examine (i) the sections chosen for inclusion in these textbooks, (ii) what punctuation marks are used and where, (iii) the textual interpretations partly reflected in the use of punctuation marks, and (iv) the content of notes. We also introduce the content of "Thought and Practice" provided in the last chapter of *Gobun*. Thus by analyzing the way this text is used in China we present material for reexamination of the teaching of Chinese classics in Japan.

Key Words: Chinese classics teaching, comparative analyses of teaching materials in Japan and China, "Hongmen Yan (Komon no Kai)", *Koten I, Gobun.*

1．はじめに

平成6年度高等学校は新教育課程が実施され，国語科の教科書は各社とも一新したが，漢文の教材自体は，あまり変化が見られないようである。司馬遷の「鴻門の会」（『史記』）は，従来第2学年での学習教材としてほとんど全ての教科書会社が採用していたが，今回の改訂においても，「古典Ⅰ」の教材としてそのまま残されており，軒並み各教科書の中心的な作品の一つに据えられている。これは，この作品がいかに古くより多くの人に愛され，史話としてのおもしろさを見せつけるものであるかを物語るものである。また，『史記』より抄録して教材となっている作品が多い中で，群を抜いて『鴻門の会』の採用率が高いのは，大部にわたる『史記』の中でも，このドラマがそれだけで首尾完結した，圧巻というにふさわしい内容をもつものであるということを示すものといってもよかろう。教科書収録率が高いだけに，各教科書会社とも詳細な教授用指導書や参考資料があり，高等学校の現場に立つ教師もそれらを見ることができるが，この作品は中華人民共和国の高等学校教科書にあたる『高級中学課本・語文・第2冊』（高校1年後期用。以下『語文』と記す。）にもとられている[1]。今回『語文』およびその『教学参考書』すなわち教授指導書を見る機会が得られたので，その概略を紹介すると共に，日本での扱われ方と比較した結果を報告したい[2]。

比較のための資料として，『鴻門の会』を収録している新課程の「古典Ⅰ」教科書9点と，これは旧課程ながら教授用指導書数点を参照した[3]。また，本文の句読，解釈等の参考資料として，現在中国において『史記』の基本文献として扱われている『点校本史記』[4]，『史記注釈』[5]，『文白対照全訳史記』[6]を用いた。

2．収録部分について

『語文』テキストの「鴻門宴」を一読してすぐに気がつくのは，収録されている部分が非常に多いということである。項羽が函谷関に到着し，沛公の指示ですでに封鎖されていた関を当陽君らに撃破させて，関内に入った直後の「沛公軍霸上,未得与項羽相見。」を最初として，沛公が虎口を脱して自軍に帰り着き讒言者の曹無傷を誅殺する「沛公至軍,立誅殺曹無傷。」まで，一切省略部分なしでとられている。わが国の「古典Ⅰ」においてこの量にどうにか匹敵しうるものは，唯一『第一学習社本』のみで，それとて，沛公を撃破しようという項羽の存念を張良に知らせようとして，項伯が夜陰に乗じて沛公の陣営に馳せる部分すなわち「楚左尹項伯者，項羽季父也。」から，沛公が鴻門へやって来る直前まで390字を欠いている。他社はその後の「沛公旦日従百余騎来見項王,」から始まるものが多く，中にはさらに沛公の弁明の後の宴会部分のみを抄録したものもあり，『語文』に比較してはるかに量が少ない。

これは，授業に割ける時間を考えたということもあろうが，『鴻門の会』というドラマを授業でどのように扱うかという点において，根本的な姿勢の違いがあることを示すのではないかと考える。このことの詳細については後に述べるが，ここで簡単に触れておくと，「古典Ⅰ」の場合は，基本的に宴会の場面を中心として，その際の沛公および項羽の言動を通じて，双方の人柄の違いを比較したり，范増や張良，樊噲などの脇役の活躍と位置づけを考えることに重きが置かれるのに対して，『語文』の場合は，事の発端から終焉までをいずれも欠かすことのできない緊密な構成をもつものと捉えて，それぞれの関係をつかむことを重視しているのではないかというこ

とである。曹無傷が密告してから誅殺されるまでの流れを一つのドラマとして，司馬遷の筆遣いをそこに見ようとする，いわば鳥瞰図的な捉え方で作品を読み込む授業を展開するにふさわしい収録のしかたであると考える。

次に，『語文』は収録した原文を内容的に７段落に分けて改行している。これは「古典Ⅰ」と比較して，かなり少ない段落数である。たとえば，「沛公旦日従百余騎来見項王，」より「於是遂去。」までの部分を，「古典Ⅰ」５社が収録しているが，３～７段落まで１社ずつであるのを見ると，『語文』の３段落は少ない。また，３社が小見出しを設けて，たとえば第一学習社が「項羽，大いに怒る」「剣の舞」「樊噲，頭髪上指す」「沛公，虎口を脱す」などとしているのに対して，『語文』は「鴻門宴」と単元名を記すのみで，章分けをしたり小見出しをつけたりはしていない。

このことは，先にも指摘した教材のとらえ方の違いと無関係ではないと思われる。「古典Ⅰ」においても，段落の分け方や数の多い少ないは各社各様で一概に傾向としてまとめられないが，生徒の読みやすさのへの配慮が優先するように見える一方，『語文』は「教学参考書」にも触れてあって明らかなように，ドラマの構成を理解しやすいように配慮した段落分けになっている。一段落一段落がかなり長めであるのに，最後の段落がわずか「沛公至軍，立誅殺曹無傷。」の一文のみであるというのも，その証左であると言えよう。

３．句読について

次に，『語文』の本文と各「古典Ⅰ」のテキスト本文の句読の違いを示す。本稿の後の項目のための資料として，便宜上『語文』にとられた全文を掲載する。

なお，「古典Ⅰ」のテキストの多くが収録している部分を比較した結果を枠で囲んで示す。『語文』になく，「古典Ⅰ」のみに多く見られる句読点を（，）や（。）で，『語文』とは異なる場合は［，］［。］などで示した。［×］は，『語文』に見られる句読点が「古典Ⅰ」にはないことを示す。

また，『語文』の字体は現代中国で通行のいわゆる簡体字であるが，以下の引用はわが国の常用漢字になおしてある。

沛公軍ㇷ゚霸上，未得与項羽相見。沛公左司馬曹無傷使人言於項羽曰：“沛公欲王関中，使子嬰為相，珍宝尽有之。”項羽大怒曰：“旦日饗士卒，為撃破沛公軍ₐ！”当是時，項羽兵四十万，在新豊鴻門；沛公兵十万，在霸上。范増説項羽曰：“沛公居山東時，貪於財貨，好美姫。今入関，財物無所取，婦女無所幸，此其志不在小。吾令人望其気，皆為竜虎，成五采，此天子気也。急撃勿失！”

楚左尹項伯者，項羽季父也，素善留侯張良。張良是時従沛公，項伯乃夜馳之沛公軍，私見張良，具告以事，欲呼張良与倶去，曰：“毋従倶死也。”張良曰：“臣為韓王送沛公，沛公今事有急，亡去不義，不可不語。”良乃入，具告沛公。沛公大驚，曰：“為之奈何？”張良曰：“誰為大王為此計者？”曰：“鯫生説我曰：‘距ㇵ関，毋内ㇷ゚諸侯，秦地可尽王也。’故聴之。”良曰：“料大王士卒足以当項王乎？”沛公黙然，曰：“固不如也。且為之奈何？”張良曰：“請往謂項伯，言沛公不敢背項王也。”沛公曰：“君安与項伯有故？”張良曰：“秦時与臣游，項伯殺人，臣活之；今事有急，故幸来告良。”沛公曰：“孰与君少長？”良曰：“長於臣。”沛公曰：“君

為我呼入，吾得兄事之。”張良出，要項伯。項伯即入見沛公。沛公奉巵酒為寿，約為婚姻，曰：“吾入関，秋毫不敢有所近，籍吏民，封府庫，而待将軍。所以遣将守関者，備他盗之出入与非常也。日夜望将軍至，豈敢反乎！願伯具言臣之不敢倍エ徳也。”項伯許諾，謂沛公曰：“旦日不可不蚤ネ自来謝項王。”沛公曰：“諾。”於是項伯復夜去，至軍中，具以沛公言報項王，因言曰：“沛公不先破関中，公豈敢入乎？今人有大功而撃之，不義也。不如因善遇之。”項王許諾。

沛公旦日従百余騎（，）来見項王，至鴻門，［。］謝曰：“臣与将軍戮力而攻秦，［。］将軍戦河北，臣戦河南，［。］然不自意（，）能先入関破秦，得復見将軍於此1。今者有小人之言，令将軍与臣有郤カ……”項王曰：“此沛公左司馬曹無傷言之。不然，籍何以至此？”項王即日（，）因留沛公与飲。項王，項伯東嚮坐；［，］亜父南嚮坐，［。］一亜父者，范増也；［。］沛公北嚮坐；［，］張良西嚮侍。范増数目項王，挙所佩玉玦（，）以示之者三，［。］項王黙然不応。范増起，出召項荘，謂曰：“君王為人不忍。若入前為寿，（。）寿畢，［×］請以剣舞，因撃沛公於坐，［×］殺之。不者b，若属皆且為所虜c！”荘則入為寿。寿畢，［×］曰：“君王与沛公飲，［。］軍中無以為楽，［。］請以剣舞2。”項王曰：“諾。”項荘抜剣起舞。項伯亦抜剣起舞，常以身翼蔽沛公，［。］荘不得撃。

於是張良至軍門（，）見樊噲。樊噲曰：“今日之事何如？”良曰：“甚急！今者項荘抜剣舞，［。］其意常在沛公也。”噲曰：“此迫矣！臣請（，）入，［×］与之同命3d。”噲即帯剣擁盾入軍門。交戟之衛士（，）欲止不内。樊噲側其盾（，）以撞，［，×］衛士仆地4。噲遂入，披帷西嚮立，瞋ネ目視項王，［。］頭髪上指，目眦尽裂。項王按剣而跽曰：“客何為者。”張良曰：“沛公之参乗樊噲者也。”項王曰：“壮士！一賜之巵酒。”則与斗巵酒。噲拝謝，［×］起，立而飲之。項王曰：“賜之彘肩。”則与一生彘肩。樊噲覆其盾於地，加彘肩上，抜剣（，）切而啗之。項王曰：“壮士！能復飲乎？”樊噲曰：“臣死且不避，［。］巵酒安足辞！夫秦王有虎狼之心，［。］殺人如不能挙，刑ヶ人如恐不勝，［。］天下皆叛之5。懐王与諸将約曰：‘先破秦入咸陽者（，）王之e。’今（，）沛公先破秦入咸陽，毫毛不敢有所近，［。］封閉宮室，還軍覇上，以待大王来。故遣将守関者，備他盗出入与非常也。労苦而功高如此，［。］未有封侯之賞，［。］而聴細説，欲誅有功之人6，［。］此亡秦之続耳f。窃為大王不取也！”項王未有以応，［。］曰：“坐。”樊噲従良坐。坐須臾，沛公起如厠，［。］因招樊噲出。

沛公已出，［。］項王使都尉陳平召沛公。沛公曰：“今者出，未辞也，［。］為之奈何？”樊噲曰：“大行ヶ不顧細謹，大礼不辞小譲。如今（，）人方為刀俎，我為魚肉，［。］何辞為g？”於是遂去。乃令張良留謝。良問曰：“大王来何操？”曰：“我持白璧一双，欲献項王，玉斗一双，欲与亜父。［，］会其怒，不敢献。公為我献之。”張良曰：“謹コ諾。”当是時，項王軍在鴻門下，沛公軍在覇上，相去四十里。沛公則置車騎，脱身独騎，与樊噲、夏侯嬰、靳彊、紀信等四人持剣盾歩走，従酈山下，道芷陽間行。沛公謂張良曰：“従此道至吾軍，不過二十里耳。度我至軍中，公乃入。”

沛公已去，間至軍中。張良入謝，［×］曰：“沛公不勝桮杓，不能辞。謹使臣良奉白璧一双，再拝献大王足下，玉斗一双，再拝奉大将軍足下。”項王曰：“沛公安在？”良曰：“聞大王有意督過之，脱身独去，［。］已至軍矣。”項王則受璧，置之坐上。亜父受玉斗，置之地，抜剣撞而破之，［×］曰：“唉，豎子（，×）不足与謀7！奪項王天下者（，）必沛公也。吾属今為之虜矣！”

沛公至軍,立誅殺曹無傷。

一見してわかるように，『語文』は「古典Ⅰ」より１文がはるかに長い。逆に言うなら，我々は，中国人なら１文として読む部分を，こま切れにして読んでいるということだ。たとえば，傍線部２は，「古典Ⅰ」では「君王沛公と飲む。軍中以て楽しみを為す無し。請ふ剣を以て舞はん。」と３つの文に分けて訓読しているが，『語文』では１文，すなわち，「大王は沛公と酒をお飲みですが，軍隊の中には何の娯楽もございませんので，私にひとつ剣をもって舞わせて下さい。」と１文として解釈する[7]。また，傍線部５は，「古典Ⅰ」では「夫れ秦王虎狼の心有り。人を殺すこと挙ぐる能はざるがごとく，人を刑すること勝へざるを恐るるがごとし。天下皆之に叛く。」とやはり３つの文に分けて読むが，『語文』では，「秦王には虎狼と同じような心根があり，人を殺すのはただ殺し尽くせないことを恐れ，人を刑罰に処するのは（酷刑を）用い尽くせないことを恐れており，（それゆえ）天下の人はみな彼にそむいた。」と１文として解する[8]。同様に傍線部６は，「労苦して功高きこと此のごとし。未だ封侯の賞有らず。而も細説を聴き，有功の人を誅せんと欲す。」と３つの文に分けて我々は読むが，『語文』では，「このように労苦して功が高いのに，封侯の褒美を得ることがないばかりか，小人の讒言を聞き入れることで，かえってこのような有功の人を殺そうとしている。」と１文に解釈する[9]。これは，いずれも漢文訓読体と中国語との性質の違いによるものであろうが，我々がともすれば訓読の語調に引きずられて，現代の日本語でなら，１文で解釈してもよさそうな箇所を，わざわざぶつぶつに切って口語訳し，その不自然さに甘んじがちなのを，反省してみるよい材料になりそうだ。訓読の語調で短めに切り，それが司馬遷の文体だと早合点しないようにしなければなるまい。［。］で示してある箇所を読点として読みかえ，『語文』の句読に従って読んでみると，上の例に示したように不思議に違和感なく解釈できるのである。

次に，傍線部１は，『語文』が読点をつけないのに，「古典Ⅰ」の教科書が例外なく「然不自意，能先入関破秦，得復見将軍於此。」と読点をつけ，「然れども自ら意はざりき，能く先に関に入り秦を破り，復た将軍に此に見ゆるを得んとは。」と訓読するのが気になるところだ。中国語の構造から考えれば，「能先～於此」は「意」の補語にあたるのだから，読点をつけるのは不自然のように思うが，訓読の習慣上，補語や目的語にあたる部分が長い場合，「聞く～と。」とか「請ふ～と。」などと述語を先に読むことが多いので，ここも読みやすさを考えてこのような読点を施すことになったのだろう。しかし，漢文の構造を大事に考えて授業を行うべき立場から見れば，この読点の施し方は少し考えさせられてしまう。多少訓点が複雑になっても，『語文』の句読に従って，「然れども自ら能く先に関に入り秦を破り，復た将軍に此に見ゆるを得んとは意はず（ざりき）。」と読んだ方が，生徒にとって漢文の構造理解に有益ではないか。まして，訓読に従って「しかし自分では思ってもみませんでした，～とは。」と倒置して口語訳し，この漢文が倒置法であると説明するのは問題があるだろう。

句読は本文をどう解釈するかを当然反映するが，「古典Ⅰ」で句読の揺れている部分を，『語文』がどう読んでいるかをみてみよう。傍線部４は「古典Ⅰ」で「樊噲其の盾を側てて，以て撞き，衛士地に仆る。」とも「樊噲其の盾を側てて，以て衛士を撞き，地に仆す。」とも読んでいるが，『語文』は前者をとっている。「樊噲は盾を斜めにしてそれでひと突きし，衛兵はみな地に倒れた。」と解釈するのである[10]。

傍線部７は，事が失敗に帰し，范増が暗に項羽をそしって独白する場面だが，「唉，豎子，与

に謀るに足らず。」と「唉，豎子与に謀るに足らず。」の二つの読みが行われているが，『語文』は後者をとる。「ああ，小僧は共に大事を謀るに値しない。」と解釈するのである。『鴻門の会』を締めくくる重要な場面であり，「ああ，小僧め。」ととるか，「ああ，小僧は～」ととるか決め難く悩むところだが，『語文』が後者を選択しているのは興味深い。

句読の違いについて，もう一つ，傍線部３は，「古典Ⅰ」は例外なく「臣請ふ，入りて之と命を同じくせん。」と読むが，『語文』は「臣請入，与之同命。」とする。「どうか私に中に入らせて下さい，彼と運命を共にします。」と解釈するのであろう。なるほど当然このようにも読めたわけである。危急の場合であり，日本の訓読よりも文節を短く読む方が，樊噲の気持ちをよく表し得て自然で，この場面にはふさわしいかも知れない[11]。

概して「古典Ⅰ」の句読は，漢文訓読の語調に合わせて，読みやすいように施されていることが，『語文』と比較すると歴然である。訓読された文は日本語だという見地からすれば，日本人が読みやすいように句読を施せばそれでいいのかも知れないが，一方で異なる言語として漢文の構造を視覚的にとらえる学習も重要であるはずで，中国人の見た文の構成を，資料として比較検討することも意味のあることではないかと考える。

4．語注について

『語文』と「古典Ⅰ」を語注の点で比較してみると，まず「古典Ⅰ」の方が圧倒的に語注の数が多い。辞書を引けばすぐわかるような語にまで注が施してあったり，少し込み入った所は口語訳がつけられるのが，『鴻門の会』に限らず日本の教科書の特徴である。（実際，教育現場ではかえって丁寧すぎたり煩雑な語注が指導のじゃまになることが多い。）したがって，『語文』が語注をつけた箇所は，ほぼ「古典Ⅰ」でもつけられているが，比較していくつか気のついたことを指摘しておく[12]。

まず，「古典Ⅰ」が必ずといっていいほど語注をつけた語で，『語文』ではつけられないものとして，波線部ｂ「不者」が挙げられる。「古典Ⅰ」では概ね「もしそうしなければ。『不然』に同じ。」とある。この「不」は「否」と同じで，発音も「bù」ではなく「fǒu」と発音されるべきところで，現代中国語の用法とは大いに異なるにもかかわらず，語注が施されていないのは理解に苦しむが，他の教材ですでに学習済みであるのかも知れない[13]。

波線部ｃ「若属皆且為所虜」は，「古典Ⅰ」は「おまえたちは，みな捕虜にされてしまうだろう。」と解し，受身の用法である旨が記されている例が多いが，『語文』には語注がない。わが国では「Ａ為Ｂ所Ｃ」（ＡはＢのＣする所と為る）という受身の形の「Ｂ」が省略されたものと教えている。『教学指導書』に添付されている「訳文」を見る限り，「あなたがた一党はみんな彼の捕虜となるだろう。」と訳されている[14]。そもそもここの「虜」は「（～を）捕虜にする」の意を表す動詞として他に用例も多く，「所虜」とは「捕虜にする対象」すなわち捕虜に他ならないのだから，わざわざ受身に解する必要はないのかも知れない。また，後文の「吾属今為之虜矣」（吾が属今に之が虜と為らん）と内容的に一致する。

次に，「古典Ⅰ」で解釈の揺れている部分を『語文』がどう注をつけているかを示す。波線部ａ「為撃破沛公軍」の「為」について，「～のために。後に客語『我』（項羽の自称）が省略されている。」と注する。この箇所は第一学習社の教科書にしかとられていないが，「沛公の軍を撃破するを為さん」と読み，解釈を異にする。『語文』は「（私の）ために攻め込んで劉邦の軍

隊をせん滅させよ。」と解釈するのであろう。

波線部ｄ「与之同命」は，「之」の指示内容を「沛公」として「命」を「運命」とする説と「項荘」として「命」を「生命」とする説の２つが行われているが，「古典Ｉ」は指導書に二説を挙げながらもすべて前者を自然な解釈とする。この箇所に『語文』は「彼らとともに命を捨てる。『之』は，項羽らを指す。『同命』は，一緒に死ぬ，命を賭ける。」と語注をつけて後者をとり，前者の解釈は紹介していない。すなわち，「項羽（ら）と生命を共にします。」と解するのである[15]。

波線部ｆ「此亡秦之続耳」は，「古典Ｉ」がいずれも「滅んだ秦の二の舞だ」と解するのに対して，『語文』は「すでに滅んだ秦朝の後継者，秦朝滅亡の同じ轍を踏むの意」と説く。「古典Ｉ」もそのつもりであろうが，生徒の立場に立てば，当然このように順を踏んで注をつけたほうがよいだろう。

波線部ｅ「王之」は，「之に王とせん」「之に王たらしめん」「之に王たらん」などの読みがあって，一昔まえにあった「之を王とせん」という読みが「古典Ｉ」では影をひそめ，今は圧倒的に「之に王とせん」と読んでいる。「之に」と読んだ場合は「之」が「関中」を指し，「之を」と読むと「先破秦入咸陽者」を指すが，「沛公欲王関中」（沛公関中に王たらんと欲す）などの例に合わせて，この箇所も「之に王とす」としたものであろう。しかし，『語文』は，「『彼を王とする』に同じ。」として，「之に～」の説をとらない[16]。さらにこの「王」の用法については，後に練習問題を設けて現代における用いられ方との違いを考察させてすらいるが，興味深いことである。

波線部ｇ「何辞為」は，「何為辞」の「辞」を強調するために倒置したとする説と，「為」が疑問・反語の終尾詞として「何ぞ辞せんや。」と解する説との２説があるが，「古典Ｉ」では概ね前者で「何ぞ辞するを為さん。」と読んでいる。しかし，『語文』では，「なんで挨拶をする（必要がある）のか。『為』は，句末の語気詞で，常に疑問文で用いられる。」と注し，「為」の発音を「wéi」とする。私見ながら，「何ぞ辞するを為さん」と読もうと，また「何の辞をか為さん」と読もうと，漢文の句法では強調の場合は「何辞之為」となるはずであり，すぐさま「之」が省略されたものと考えるのはいかがなものかと考える。これは烏江亭の「天之亡我，我何渡為」と同じく，『語文』の解釈が妥当ではないだろうか[17]。

最後に『語文』の語注の特徴を述べておく。中国語では同じ漢字でも異なる品詞である場合があり，また，古典教材中の漢字が現在専ら使われている用法とは異なった品詞の場合があるので，注意すべき場合には，その旨が記されている。たとえば二重傍線部ア「軍」には「駐留する。動詞。」と注し，ク「刑」には「刀で斬り突き刺す。動詞。」，ケ「行」は「行為，行い。名詞。」，コ「謹」は「恭敬の語気を表す副詞。」とするがごときである。もちろん，これらは「古典Ｉ」ではそれぞれにふさわしいように訓読するのみで，特に用法について，語注に示すことはない。しかし，『語文』の場合は，後でも述べるが，これらの品詞の違いを大事にとらえていて，演習問題をも設けて学習している。漢字のみで国語を成立させている国との学習すべき内容の違いはあるだろうが，単に読んであればよしとして，ともすれば見過ごしがちな漢字の多様な意味と用法にきちんと触れていくことは，我々の現場においても必要なのではないかと反省させられる。

また，二重傍線部イ「距」・ウ「内」・エ「倍」・オ「蚤」・カ「郤」は，それぞれ「『拒』に同じで，防ぐの意。」・「『納』に同じで，受け入れる。」・「恩を忘れる。『背』に同じ。」・「『早』に同じ。」・「『隙』に同じで，みぞができる，憎み嫌う。」と注するが，いずれも，

同じ発音声調で同じ意味を表す漢字を示して，語注としたものである。いわゆる「音通」と称せられる伝統的釈義の方法が教育の現場でも十分に生かされている事情を知ることができる。『語文』は，日本の教科書のように，本文に直接ルビを施すことはないが，読みを示す必要がある場合は，語注にそれを示す。たとえば，二重傍線部キ「瞋」に，「〔瞋（chēn）目〕目をみはる。」とするごときである。先に示した「距」などの語注も読みを示すための別の形式である。

5．「思考と練習」について

日本の教科書も各教材ごとに末尾に「学習」とか「学習の手引き」，「研究」などと銘打って，その教材について，重点的に学習すべきことや，考えるべきことをまとめてあるのが普通だが，『語文』の場合も，「思考と練習」として「鴻門の会」の場合は五つの課題が設けられている。これが「古典Ⅰ」とは，かなり内容を異にしている。

まずは「思考」の問題として，次の設問がある。

「張良と范増はともに策士で，智に満ち計略も多く，鴻門の会は実際上は二人が智を戦わせた過程でもある。宴会の前後における劉邦と項羽の言行に考え方の変化が現れているのを分析して，二人の策士の異なった働きかけとはかりごとによって得られた異なった効果について話し合ってみよう。」

この設問に対して，『教学指導書』は大きく紙面を割いて説明しているが，かいつまんで書くと，次のごとくである。「鴻門の会」（『語文』収録部分）は，内容的に宴会の前・宴会中・宴会の後の三つの部分に分けられる[18]。宴会の前とは第1，2段落（前記の教材本文の段落に従う）を指し，沛公と項羽の両軍の陣を置いた場所，力の差，衝突の原因とそれぞれの舞台裏の活動を描く。そして，曹無傷の密告を導火線として，范増のあおり立てによる対立の激化，項伯が張良のもとを訪れたことによる状況の変化，それにともない項伯が項羽を諫めたことを順に描き，「情勢が緊張から徐々に緩和し，それによって次の鴻門の会での驚くべき闘争の場面に入っていくのであり，下文の下地となっている。」部分に相当する。

宴会中とは第3，4段落を指し，沛公が謝罪したこと，范増が決意をうながしたこと，項荘の剣舞，樊噲の闖入の4つの事件が描かれ，「劉邦・項羽双方の対立を反映し，しかも項羽側内部の范増と項羽の劉邦を殺すか殺さざるか，項荘と項伯の『劉邦を殺す』か『劉邦を守る』かの対立をも反映している。これらの対立が入り交じり交錯して，緊張有り弛緩有り，波乱に満ち起伏に富み，人をはらはらさせるのである。」とする。いうまでもなく「鴻門の会」のクライマックスである。

この緊張と弛緩について，『教学指導書』は「三起三落」すなわち「三つの上昇（緊張）と三つの下降（弛緩）」としてとらえる説を紹介する。三つの上昇とは，①范増が沛公殺害の決意を項羽に促すところ，②同じく范増が項荘に沛公刺殺を命じたところ，③樊噲が会場に闖入し項羽を責めるところで，「話の筋は最高潮に発展し，緊張した雰囲気は絶頂に達する。」三つの下降とは，①項羽が樊噲の闖入をとがめず「壮士」と褒めてしまうところ，②樊噲に責め詰められた後も彼を座らせてしまうところ，③沛公が厠に行くことを口実に脱出するところである。

宴会の後とは第5，6，7段落で，沛公の脱出と張良の事後処理を描く。「項羽が鴻門の会での闘争に敗れ，劉邦を消し去る機会を失ってしまったことだけでなく，彼と范増の間の対立を深めたこと，最後のつめに失敗し烏江亭で自ら首はねる禍根を作ったことをも描く。そして劉邦は

曹無傷を誅殺して，内部はさらに団結を加えてしまう。」とあるように，「鴻門の会」の結末を描くだけでなく，沛公と項羽の運命的な未来の伏線としての役割を果たしているとする。

以上のごとく『語文』は，「鴻門の会」を「『劉邦を殺すか殺さざるか』をカギにして，時間的な順序に基づいて話の筋を展開し，項羽が劉邦を撃とうとしたことに始まり，劉邦が解放されたことに終わる，曹無傷が密告したことに始まり，曹無傷が誅殺されたことに終わる，范増が項羽に勧めたことに始まり，范増が項羽を罵ることに終わる」一分の隙もない構成として，話の筋の展開とそれぞれの人物の役割を非常に合理的にとらえている。沛公と項羽の考え方の変化，張良と范増の双方の駆け引きもこの中で考えていくべきものと見ている。『語文』が「古典Ⅰ」の教科書よりもはるかに収録部分が多く，省略を一切しないゆえんもここにあるのだろう。また，前述したように，『語文』の本文は，1段落が非常に長いが，単に読みやすさを考えて設定した段落ではなく，あくまで構成の理解を目的に段落分けしたものである。「古典Ⅰ」はどうしても授業時間数の配分上，場面のこま切れの感が否めず，省略部分はあらすじで済ます傾向にある。中にはいわゆるクライマックスの宴会部分だけをとったものすらある。そのためせっかくのいわゆる手に汗握るドラマの魅力が半減してしまっている傾向がある。漢文は昨今生徒にも敬遠されがちだが，それだけに生徒を惹きつける教材の精選が必須である。「鴻門の会」をそれだけで完結した魅力あるドラマとして『語文』のように捉えていくことは，取り入れ方によっては，生徒の漢文離れに対する有効な打開策につながるかも知れない。

なお，この設問の資料となる『教学指導書』の「課文説明」すなわち「教材の説明」を読むと，沛公と項羽に対する見方が特徴的であることがわかる。この中で項羽は「尊大にして思い上がった性格」で，「名誉を求め，敵を軽んじ思い上がり，知略が少なく軽々しく信じ，人を用いるのがへたで，優柔不断である一方，率直で雄々しい武人の性格を帯びている。」ととらえられる。それは曹無傷の密告をすぐ信じたこと，項伯の説得に沛公を撃つ考えを変えたこと，沛公にうまい言葉で謝罪されて得意満面になり彼を許すばかりか宴会まで開いたこと，情報源が曹無傷であることをもらしたこと，范増の暗示を無視したこと，項伯が沛公をかばって舞っても見て見ぬ振りをしたこと，樊噲の闖入を咎めず逆に壮士とほめ酒食を振る舞ったこと，樊噲の言葉に逆にやましい気持ちをもってしまうことなどの行動が論拠となっている。

また，沛公は「機転のきく狡猾な性格」で，「人を用いることに長じ，口達者であり，突発的な状況に対応するのがうまい。」とされる。それはたとえば，関に入った後すぐに官民を登録し府庫を封印し函谷関を封鎖して関中の王となろうとしたこと，項羽が激怒して自分を撃破しようとしているのを知って驚きすぐさま張良に教えを求めたこと，函谷関を封鎖したのは他ならぬ自分の誤りなのに進言した鯫生に責任を押しつけたこと，「作り声でへりくだり」項伯を味方に引き入れたこと，「甘い言葉で」（「うそをついて」ともいう）項羽を騙し本来自分たちが同志であって敵ではないことを訴えたこと，項羽にはとうてい力でかなわないと表明して項羽の気持ちを満足させたこと，項羽が激怒してしまったのも小人の言葉によるものとして項羽を「理由もなく人を責めた」罪から逃れさせ安堵させたこと，自ら「臣」と称してへりくだり関中に王たらんとする野心は事実無根であると否定し項羽の好感を得たことなどが論拠である。

『教学指導書』はさらに「作者は対比の手法をうまく使いこなしてもおり，人物の性格の特徴を更に鮮明かつ際だたせている。」とし，「文中では四組の人物が描かれている。主将は項羽と劉邦，参謀は范増と張良，部将は項荘と樊噲，裏切り者は項伯と曹無傷，曹無傷のことがあまり多くは書かれていない他は，その他の人物はひとしく生き生きと描かれ，互いに照り映え，四面

に躍るようである。」と例を挙げながら評している。これらは非常に冷静で客観的な見方である。我々日本人はいわゆる判官びいきの面があって，項羽の数多い欠点は認めながらも，彼をどうしても悲劇の英雄として美化しがちである。また，沛公についてもさすがは天下をとるだけの器であると称賛する方向に授業も展開するのではないか。それに比較するといささか冷ややかに過ぎるのではとすら感じてしまう『語文』の読みだが，一方でこのような冷静な判断が我々の授業にも必要であると感じる。また，このような緻密な解釈が授業の指針として示されていることが，『語文』の収録本文が大部にして省略がない理由の一つであろうと思われる[19]。

次に「練習」の問題として，大きく5つある設問のうち3題を割いて，ことばの意味や用法を習得するための問題が設けられているので紹介する。まずは設問2である。

「次の文中の加点部の語は，もともとどんな意味の語に属するもので，文中における意味と用法は，どんな変化が起きているか。」

1．沛公軍霸上
2．范増数目項王
3．先破秦入咸陽者王之
4．項伯殺人，臣活之
5．交戟衛士欲止不内
6．刑人如恐不勝
7．素善留侯張良

この設問に対する『教学指導書』の模範解答は，次のごとくである。

1．軍：　もとは名詞，軍隊。ここでは動詞で，駐軍する，駐屯する。
2．目：　もとは名詞，目。ここでは動詞で，目で気持ちを表す，目くばせする。
3．王：　もとは名詞，王。ここでは動詞で，使役の用法で，……を封じて王にする。
4．活：　もとは動詞，生きている。ここでは使役の用法で，……を生かす，命を救う。
5．止：　もとは動詞，停止する。ここでは使役の用法で，……を止まらせる，阻止する。
6．刑：　もとは名詞，刑法，刑罰。ここでは動詞で，刑罰を加える。
7．善：　もとは形容詞，善良である。ここでは動詞で，……とよしみを結ぶ。

これらは通常生徒が用いている漢字の意味とは異なった意味で用いられているものを挙げて，用法の確認をするものである。たとえば1の場合，普段は「軍」という名詞の意味でしか用いないが，本文では動詞で用いられているから注意せよということである。これは単にことばの意味の多様性を指摘するものではなく，中国人にとって古典にあたる漢文を読み解いていくにあたって，乗り越えなければならない「現代語」と「古典語」の間の壁すなわち差を理解するためのものと考えられる。日本の場合，「軍し」とすでに動詞で読んであり，それで十分意味が通じるところから，授業者もついそのまま通り越してしまいがちだが，漢字の本来の意味・用法と派生・応用について，今少し厳密になるべきことを反省させてくれる設問であるといえよう。

設問3。

「次の文中の加点部の名詞が修飾している動詞を探し，これらの名詞の用法を説明しなさい。」

1．卒廷見相如，畢礼而帰之
2．項伯亦抜剣起舞，常以身翼蔽沛公
3．君為我呼入，吾得兄事之

4．叩石墾壌，箕畚運於渤海之尾
5．潭西南而望，斗折蛇行，明滅可見

これに対する『教学指導書』の模範解答。

1．廷：　廷は「見」の修飾語として，行動が行われる場所を示す。
2．翼：　翼は「蔽」の修飾語として，動作が行われる状態を示す。
3．兄：　兄は「事」の修飾語として，人に応対する態度を示す。
4．箕畚：　「運」の修飾語として，運ぶ道具を示す。
5．斗：　「折」の修飾語として，　蛇：　「行」の修飾語として，動作の状態を示す。

われわれが通常単に「廷見す」「翼蔽す」「兄事す」などと熟語で読む漢語について，それに含まれる名詞と動詞の関係を問うもので，熟語の成り立ちを理解させる設問である。こういった形式の指導は日本では漢文入門時には行っても，後はほとんど触れないのが現状であろう。

設問4は次の通りである。

「次の各文中における『挙』『謝』『如』『道』『因』の性質と意味を説明しなさい。」

1．
①殺人如不能挙
②挙所佩玉　以示之者三
③吾不能挙全呉之地，十万之衆，受制於人
④挙大計亦死
⑤中江挙帆
⑥挙不勝挙

2．
①不可不蚤自来謝項王
②噲拝謝，起，立而飲之
③乃令張良留謝

3．
①固不如也
②沛公起如厠
③労苦而功高如此
④如有離違，宜別図之
⑤苟如君言，劉豫州何不遂事之乎

4．
①道芷陽間行
②従此道至吾軍
③師者，所以伝道受業解惑也
④文武之道，一張一弛
⑤彼与彼年相若，道相似也

5．
①不如因善遇之
②因賓客至藺相如門謝罪
③相如因持璧却立
④因撃沛公於坐
⑤因循守旧

『教学指導書』の模範解答は次の通りである。

1．
①挙：すべて，副詞である。
②挙：持ち上げる，動詞である。
③挙：取る，動詞である。
④挙：挙行する，動詞である。
⑤挙：引く，動詞である。
⑥挙：提示する，動詞である。

2．
①謝：謝罪する，動詞である。
②謝：お礼を言う，動詞である。
③謝：謝絶する，動詞である。

3．
①如：及ぶ。「不如」は，及ばない，動詞である。
②如：行く，動詞である。
③如：似ている，動詞である。
④如：もし，接続詞である。
⑤如：似ている，動詞である。

4．
①道：～を経て行く，動詞である。
②道：道路，名詞である。
③道：孔孟の学説，名詞である。
④道：方法，法則，名詞である。
⑤道：めざしている道理，名詞である。

5．
①因：機会を利用する，前置詞である。
②因：頼る，前置詞である。
③因：そこで，接続詞である。
④因：そこで，副詞である。
⑤因：踏襲する，動詞である。

これは我々も現場においてよく似たことを行う指導内容であるが，一つの漢字のもつ意味と用法を我々が扱うよりも厳密に，また多様に分類し文法的な理解を求めている。たとえば我々は5の「因」などは「よりて」と読んで，③の場合でも④の場合でも「そこで」と訳して済ましがちだが，『語文』では，より厳密な用法の違いにまで学習を進めているのは，大変興味深い。

総じて『語文』は，ことばの意味と用法の学習が非常に充実している。漢文を日本の古典に属するものとしてとらえ，すべてすでに訓読されたもののみを対象に，日本語に傾いて授業を行っている日本の高等学校の教育とは，学習内容が異なるのは当然だが，一方で授業においても漢文自体の言語の構造や性質を大事にすべきだという考え方もあり，『語文』の指導内容は，十分参考になる。

『語文』の最後の設問は，いわば応用問題で，大変レベルの高いもので，文章題になっている。

夫秦失其政陳渉首難豪傑蠭起相与並争不可勝数然羽非有尺寸乗勢起隴畝之中三年遂将五諸侯滅秦分裂天下而封王侯政由羽出號為“霸王”位雖不終近古以来未嘗有也

及羽背関懐楚，放逐義帝而自立，怨王侯叛己，難＿。自矜功伐，奮其私智而不師古，謂霸王之業,欲以力征経営天下，五年卒亡其国，身死東城，尚不覚寤　不自責，過矣。＿引“天亡我,非用兵之罪＿”,豈不謬哉！（《史記・項羽本紀》）

1．この二段落の文中の「羽」とは項羽のことである。作者が基本的にどんな見方をし，文末

の「豈不謬哉」という判断結果が，どの論述から導き出されたものか，話し合ってみよう。

2．第一段落の文章に句読点を施しなさい。

3．後の虚詞の中から第二段落の文中の＿＿部を補充するのに適切なものを選びなさい。

也・焉・乎・矣・而・何・乃

4．加点部の正確な意味に注意しながら，文中の＿＿部を口語訳しなさい。

初見の文章に対して，しかも完全な白文に句読点を施すわけであるから，非常に難度の高いものだと思う。このような形式の問題に対しては，設問2～4のようにことばの意味や用法をきちんと理解し，それを実際に活かす指導が常から行われていなければならない。　また，3については，日本では置き字や接続詞といわれる語についての演習で，他の教材においてもさかんに演習がなされている。中国においては，これらの日本では直接訓読されないためにどちらかというと軽視されがちな類の語の理解に大きな力を注いでいるようである。文意を微妙に左右するこれらの語をきちんと学習し，解釈に積極的に反映していくことは，日本の漢文教育においても重要なことではないかと思う。

6．補充資料について

『教学指導書』には，授業もしくは教材研究のための補充資料が次のように4点用意されている。

1．「鴻門の会」後の簡単な紹介

2．司馬遷が『高祖本紀』の中で劉邦について批評したものの抜粋

3．「鴻門の会」の席次について

4．「生毚肩」の「生」の字の異なった解釈について

このうち，3と4については，われわれも各指導書において，類似の説明を見ることができるが，1と2に特徴的なものが見られるので紹介する。まず1において，項羽の行為が歴史の発展の法則に反するものであることが指摘される。

「項羽は盟主の資格で，十八の王侯を分封した。劉邦は漢王に封じられ，項羽は自ら西楚の覇王と称した。王に分かった後，彼は各王侯と封地に帰り，それぞれ領域を守り，これから安定していくことを望んだ。これは封建割拠のやり方を復活したもので，人々の願いに反するものであり，歴史の発展の法則にもとるものであった。」

また，2では，太史公（司馬遷）の歴史観を知るための資料として，『高祖本紀』の論賛に見える次の一文を挙げる。

「夏の国の政治は『忠』（質朴で誠実なこと）だが，その弊害は，凡人が『野』（粗野で礼節を欠くこと）になりがちで，だから殷の人はそれを承けて『敬』（丁重で慎み深いこと）を大事にした。『敬』の弊害は，凡人が『鬼』（鬼神に仕えるように礼儀過剰なこと）を大切にした。だから周の人はそれを承けて『文』（尊卑の差，すなわち礼節）を大事にした。『文』の弊害は，凡人が『蹇』（不誠実なこと）になりがちで，だから『蹇』を救うには『忠』をもってするのが一番である。三代の道は循環するかのようで，終わってはまた始まる。周と秦との間は『文』の弊害であったというべきである。秦の政治がそれを改めようとせず，むしろ逆に刑法をきびしくしたのは，なんと誤ったことではないか。だから漢が興って，（『文』の）弊害をうけて変革し，人々を倦ませないようにし，天の統紀を得たのである云々。」

歴史は過去から現在，現在から未来へ，反省と改善が加えられながら発展・循環していくものとする史観は，孔子の昔からあるわけだが，項羽の衰亡と沛公の興隆を，授業において，そういう大きな史観の中でとらえていこうとする姿勢は，日本ではあまり行われていないと思う。参考になるだろう。

7．おわりに

『語文』と「古典Ⅰ」において「鴻門の会」という教材の扱いがどのように異なるかという点を意識しながら，『語文』の内容を紹介しながら検討してきた。その中で大きく違うと感じるのは，「古典Ⅰ」においては，多くの場合，登場人物を沛公方と項羽方に分けてそれぞれの役割や行動をまとめさせたり，項羽と沛公の性格を対比させたりすることに集中しているのに対して，『語文』では，話の筋全体をいわば鳥瞰図的に見て，その構成を合理的にとらえようとしているということである。もちろん，これはあくまで傾向ということにはなろうが。また，『語文』が古典学習において，ことばの意味と用法をいかに大事に考えているかという点が，非常に印象深い。われわれは中国の古典を日本語に訓読して（翻訳して）読んでいる事情があるため，句法の指導をするにあたっても，ともすればどこか日本語に合わせたあいまいな部分がありがちだが，『語文』の指導は大いに参考にできるのではないかと思う。

日本の教科書や指導書には，授業時の発問例まで細かく書かれており，われわれがそれを参考にすることも多いのだが，『語文』ではそのようなことはない。したがって，中国の実際の授業の場において，どのような発問が用意され，またどのような授業展開がなされるのかは『語文』からはわからない。しかし，今回，現代中国においてどのような学習指導案が作成されているかを知りうる『高中語文教案』という資料が得られたので，また機会を改めて紹介したいと考えている。

なお，本論文は，平成６年度特定研究経費の配分を受けて行った研究成果の一部である。

注・参考資料

1）『初級中学課本・語文』『高級中学課本・語文』に収録された古典教材の全容については，青木の「現代中国における古典教育について」（全国漢文教育学会編『新しい漢文教育』創刊号，1986年）に紹介したので，参照されたい。

2）中華民国で同じ作品が扱われていると三者の比較ができておもしろいが，残念ながら『鴻門の会』の採用がない。そればかりでなく，なぜか『史記』自体がとられていないのがまた興味深いことでもある。

3）調査の対象とした教科書および教授用指導書は以下の通りである。

第一学習社「古典一　漢文編」
大修館書店「古典Ⅰ［漢文］」
明治書院「精選古典Ⅰ　漢文編」
東京書籍「古典Ⅰ」
右文書院「古典Ⅰ」
尚学図書「新選古典一」

角川書店「古典Ⅰ」
筑摩書房「古典Ⅰ」
教育出版「古典Ⅰ」　以上　教科書
東京書籍「国語Ⅱ　新訂版」
筑摩書房「国語Ⅰ　二訂版」
大修館書店「国語Ⅱ　三訂版」
第一学習社「国語二　三訂版」
尚学図書「新選　国語二　改訂版」　以上　教授用指導書

4）『点校本史記』（中華書局，1959年）

5）『史記注釈』（王利器主編。三秦出版社，1988年）

6）『文白対照全訳史記』（楊鍾賢・郝志達主編。国際文化出版公司，1991年）

7）8）9）これら3例の句読は『点校本史記』の句読とまったく同じである。『語文』の句読は概ね『点校本史記』に基づくものと思われる。また，『史記注釈』，『文白対照全訳史記』の句読も同じである。

10）『点校本史記』，『史記注釈』，『文白対照全訳史記』も同様。「仆地」という語は，韓愈の「祭湘君夫人文」にも「旧碑断折，其半仆地」と見え，やはり「仆」を自動詞に用いている。

11）「請」の語が直接話法に用いられたときは，訓読では「請以剣舞」（請ふ剣を以て舞はん）のように，「請ふ」と先に読む習慣になっているための句読であるのだろうが，「請」は後に動詞（句）を必ずとることから，『語文』のような句読か「臣請入与之同命」と句読を用いない読みがよいのかも知れない。

12）「古典Ⅰ」と『語文』の語注の相違については，青木の「中国における古典教材と教材研究（5）—『鴻門の会』（史記）—」（『漢文教室』162号 大修館）にも紹介したので，参照されたい。

13）因みに，『史記注釈』，『文白対照全訳史記』でも，同様に「そうでなければ。“不”は“否”と同じ。」という語注が施されている。

14）『高中語文教案』（1985，北京師範大学出版社）は，「為所」を受身を表すと説明している。

15）しかし，『語文教案』では，「之は沛公を指す。即ち沛公と生死を共にす。」と注し，『文白対照全訳史記』でも，「沛公と生死を共にす」と訳している。

16）『文白対照全訳史記』は，「彼を関中に王とする」と，どちらにでも解せるような訳を与えている。

17）この「為」の用法については，かつてわが国でも『漢文教室』（大修館書店）紙上で論争のあったところである。

18）「鴻門の会」を宴会前・宴会中・宴会後に分けて考えることに対しては，中国においても異論がある。所報第30号「日中両国語共通教材の中国における教材研究の紹介」所収の青木・中井訳「《鴻門の宴》の段落分けについて」（任夢蘭）を参照されたい。

19）同様の視点からの教材分析，教材研究が『中国語文教学』1988年3月号に掲載された「《鴻門の会》にみられる構成の巧みさについて」（駱紹勛著）にみられる。この論文については，前記の青木著「中国における古典教材と教材研究（5）—『鴻門の会』（史記）—」に翻訳されて紹介されているので参照されたい。